

総合研究協議会

関東大震災 100 周年提言（案）について

—日本の建築・まち・地域の新常識

[資料あり]

9 月 13 日（水）10:00～13:30

百周年時計台記念館百周年記念ホール+オンライン

司会 久田嘉章（工学院大学）

副司会 古賀純子（芝浦工業大学）

記録 佐藤弘美（金沢工業大学）

1.主旨説明 川口健一（東京大学）

2.主題解説

①防火 原田和典（京都大学）

②構造 五十田博（京都大学）

③建築計画 清家 剛（東京大学）

④環境工学 秋元孝之（芝浦工業大学）

⑤教育 平田京子（日本女子大学）

3. 討論 モデレーター：齊藤広子（横浜市立大学）

上記登壇者・加藤孝明（東京大学）・久田嘉章（前掲）

4.まとめ 川口健一（前掲）

本会では、関東大震災 100 周年に際して、提言「日本の建築・まち・地域の新常識（案）」を準備している。本総合研究協議会では「提言（案）」を紹介し、討論を通して会員の意見を伺う機会としたい。関東大震災（1923 年）とその後の 100 年間は日本にとって激動の時代であった。その経験を踏まえて、次の 100 年の建築・まちを利用者にとってより良いものにしていくための提言としたいと考えている。希望ある理想像を共有することで、少子高齢化・人口減少の中、災害の多い国でも、限られたリソースを上手に使うことで、明るい未来を築いていくことは可能だと考えている。過去 100 年はモノとしての日本の建築技術は高度に発達してきた。今後 100 年は主人公である多様な人々の幸福のために、その技術をどう役立てるかを考え、実現していく時代である。新築時の美しさや見栄えの良さよりも、そこで暮らす人々の営み、コミュニティを長期にわたって守り育てていく建築が優れた建築として評価される時代であり、そのような社会を築いていくべきであろう。日本は豊かな自然に

恵まれ、文化と技術の発展した素晴らしい国であると同時に、災害の多い国でもある。建築の役割は、全ての人々がその素晴らしさを享受しながら安全に健康に幸せに暮らしていく営みを支えることである。日本には世界のお手本となるような建築像を実現して示していくことができるはずである。

それらを実現するために、我々はどのような知見を共有し、何を（大胆に）変えていく必要があるのか？そのための「一歩先の常識」や「わかっているけど実行できていない常識」を「新常識」と呼び、一般の人々にも分かり易い言葉で、本会からの提言として発信していく予定である。本総合研究協議会では、前半はこの提言のまとめに携わった関東大震災 100 周年タスクフォースの委員から各専門分野における 100 年の進歩とこれからについて簡潔に述べていただき、後半では、これらを実現していくための「新常識」について討論を行う。